

独立行政法人国立国語研究所「病院の言葉」委員会（全体会） 第5回
議事要旨

1. 日時 平成20年12月3日（水）14：00～16：30
2. 場所 学術総合センター 会議室202, 203
3. 出席者 杉戸委員長, 有森委員, 齋藤委員, 真田委員, 柴田委員, 関根委員,
鳥飼委員, 三浦委員, 矢吹委員, 吉山委員, 和田委員, 相澤委員,
徳重委員, 吉岡委員, 田中委員
4. 会議の概要
 - (1) 第4回全体会の会議録・議事要旨の確認
 - (2) 「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」（中間報告）に対する意見公募の結果について
 - ・「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」（中間報告）に対する意見公募について、中間段階の集計結果と、最終報告・市販本での意見への対応案が示され、討議を行った。
 - (3) 「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」（最終報告）について
 - ・「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」（最終報告）の構成案、中間報告から修正する部分の案が示され、討議を行った。
 - ・最終報告の構成は、中間報告をもとに、冒頭に委員長による「はしがき」を、第5章に「中間報告に寄せられた意見」を加えたものとした。
 - ・最終報告の発表は、平成21年3月の市販本の刊行日と同日とすることが確認された。
 - ・最終報告は、①冊子を作成し、関係者と中間報告書に記名して意見を寄せてくれた機関や個人に送る、②ホームページに掲載する、二つの方法で公表することとした。
 - (4) 市販本の編集と刊行について
 - ・市販本の書誌、刊行までのスケジュール、構成案、図を入れる言葉の案、コラムの案などが示され、討議を行い、次のことを決定した。
 - 書名：①「病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案—」、②「病院の言葉を分かりやすくする—工夫の提案—」のいずれかにする。
 - 刊行日：平成21年3月
 - 出版社：勁草書房 判型：A5判
 - 図版：「イレウス」「寛解」「浸潤」など、10か所程度に入れる
 - コラム：「調査結果」「寄せられた意見」「コミュニケーション」「言葉」「エッセー」などに分類し、20数編を入れる

(5) 個別の語の記述の再検討について

- ・介護老人保健施設，グループホーム，化学療法，糖尿病，心筋梗塞，脳死の各語について，どのように修正すべきかについて具体的に議論した。今回議論できなかった言葉については，次回の実務委員会で検討することとした。

5. 会議での主な意見

① 「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」（最終報告）について

- ・中間報告に寄せられた意見について，最終報告にどう生かされたかを述べることは重要なことである。
- ・最終報告書は，市販本とは異なり学術的な価値を持つものであり，提案に至るまでの方法論を述べるのが，提案を次につなげていくためにも重要である。
- ・市販本を発行し普及に努めたということも，最終報告で言及すべきである。

② 市販本の編集と刊行について

- ・書名に「患者」の言葉を入れると，あまりハッピーな響きを持たないので，入れない方がよい。
- ・書名に入れる「分かりやすい」は，「わかりやすい」と仮名で書く方がよいのではないか。
- ・国立国語研究所として，常用漢字は漢字で表記するという原則によっており，これに従うと「分かりやすい」となる。
- ・副題には「工夫の提案」と入れたい。我々は，語別の提案自体ではなく，工夫の方法を提案しているのだということを示すべきである。
- ・書名は長いものは避け，できるだけ短くする方がよい。
- ・寄せられた意見にも図を入れてほしいというものが多かった。図はもっと多くてもよいのではないか。
- ・この本に載せる図は，医療者が患者に説明するときを使うものである。説明の[まずこれだけは]に相当するような，簡略化された図が望ましい。
- ・案にあるもののほか，「ポリープ」「肝硬変」「誤嚥」などにも図があるとよい。
- ・コラムには，案にあるもののほか，医療通訳をテーマとするものも入れたい。

③ 個別の語の記述について

○介護老人保健施設

- ・複数の施設の名称に似たような名前が並んでいては，利用者は誤解をして当然である。この提案では各施設の違いを説明することが目的ではない。制度改革や名

称の変更が必要であることを、述べてはどうか。

- ・今回の提案の対象は医療者であり、制度にまで言及するのは趣旨が違う。現実を分かりやすく説明しなければならないことを述べるのがよい。

○グループホーム

- ・グループホームの歴史的経緯を、[ここに注意]に示した方がよい。

○化学療法

- ・「化学療法」という言葉は、現在でも、感染症治療の場合にも使われている。ただし、最近では悪性腫瘍に使うというイメージがあるので、感染症治療の場合にはこの言葉を使わないようになってきた。
- ・現在でも、感染症治療に「化学療法」という言葉を用いるのであれば、そのことが伝わる記述にする方がよい。

○糖尿病

- ・1型糖尿病の説明に、「からだの中にもともとインスリンが作られない」という表現を入れられないか。
- ・1型糖尿病が、「もともと」インスリンが作られないというのは、正確でない。「作られなくなった」とするのがよい。
- ・1型糖尿病はインスリンが出ない、2型糖尿病は血中濃度は高くても質が悪いという状態が続くうちに段々疲弊して出なくなる。そのことを「作用不足」と説明している。

○動脈硬化の関連語「心筋梗塞」

- ・「心筋梗塞」の[説明]の「動脈硬化などによる血管の血の巡りが悪くなり、狭心症の症状が進行したりして」という表現は、「動脈硬化により血管の血の巡りが悪くなったり、狭心症の症状が進行したりして」とすべきである。
- ・「血が全く流れなくなり」は不正確なので、「血が流れなくなり」としたい。

○脳死

- ・「脳の機能がだめになる」という表現であるが、「だめになる」は、脳死によって臓器を提供した人の家族にとってはきつい言葉である。
- ・「機能」という抽象的な漢語と、「だめになる」という日常語との落ち着きが悪い。
- ・「脳の機能が失われてしまった状態」とするのがよい。

以上